

# 注意

**イネ縞葉枯病の発生が増加しています！早急に防除対策を検討して下さい。**

## [イネ縞葉枯病とは]

- イネ縞葉枯病は、ヒメトビウンカが媒介するウイルス病です。
- イネが、ウイルスを持ったヒメトビウンカに吸汁されると感染します。
- 発病株を吸汁したヒメトビウンカはウイルスを獲得し、他のイネにも感染させます。
- イネがウイルスに感染すると、分けつが「こより状」になって葉先から垂れ下がり枯死します(ゆうれい症状)。また、穂が出すくんだり、不稔になることにより**減収**します。

## [イネ縞葉枯病の病徴と被害]



葉の病徴

葉脈に沿って黄緑色～黄白色の縞状の斑紋を生じる。



分けつ期の病徴  
(6月下旬～7月上旬)

黄緑～黄白色の縞状の斑紋を生じ、こより状に垂れ下がって枯死する(ゆうれい症状)

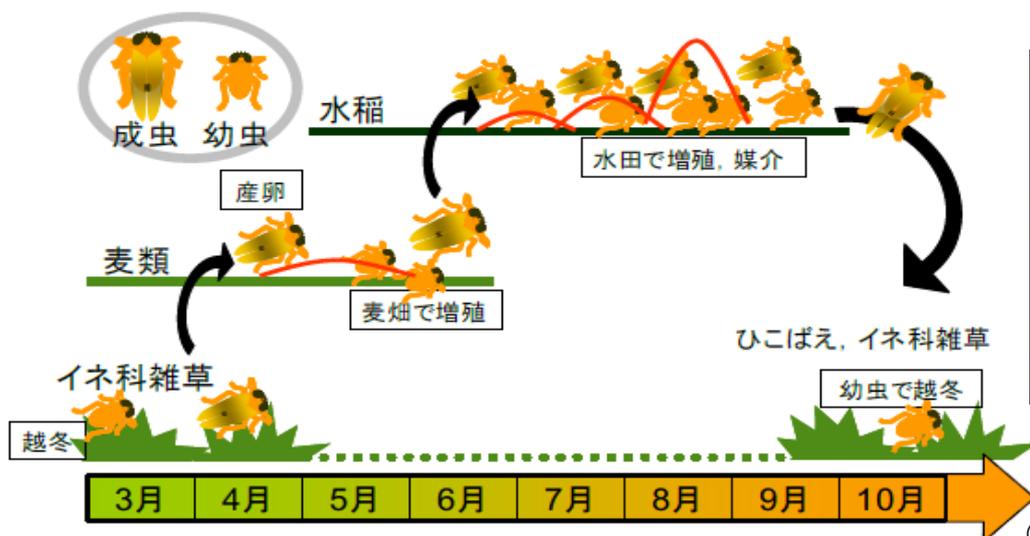


出穂期の病徴  
(7月下旬～8月上旬)

穂は出すくみとなり枯死する。籾は奇形になることが多い。

## [媒介虫ヒメトビウンカとイネ縞葉枯病の関係]

ヒメトビウンカは、幼虫がイネ科雑草で越冬し、4月上旬頃になると成虫になって麦畑に飛来します。麦畑で1回増殖し、6月上中旬頃に水田に飛び込み吸汁します。このとき、ウイルスを持った虫(保毒虫)がいるとイネがウイルスに感染します。また、保毒虫から産まれた幼虫も高確率でウイルスを持っており、周囲の株にも縞葉枯病をうつします。



媒介虫ヒメトビウンカの成虫  
(左:雄, 右:雌, 体長3~4mm)

(参考:茨城県農業総合センター農業研究所作成資料および、茨城県病害虫防除所作成資料)

**[平成29年のイネ縞葉枯病発生状況について]**

- 平成29年の発生株率は、過去10年中最高値を示した平成27年を上回り、**上昇傾向**にあります。→図1
- 発生範囲は**拡大傾向**にあります。（発生地点率がH28年度:32%→H29年度:63%に上昇）→図2
- 病原ウイルスを媒介するヒメトビウンカのウイルス保毒率は**上昇傾向**にあります。→図3

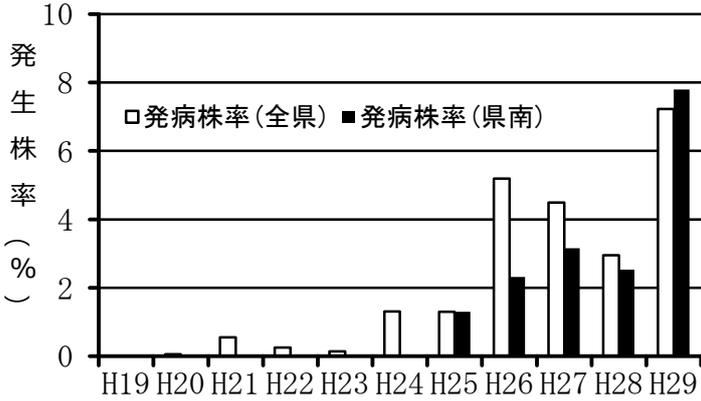


図1 県南及び全県におけるイネ縞葉枯病の発病株率(8月上旬)の年次推移

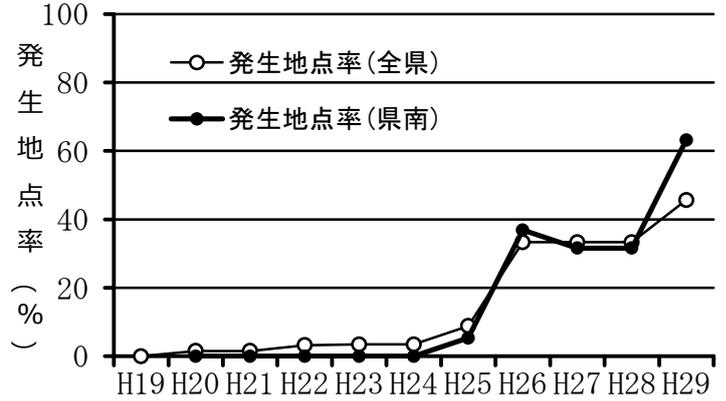


図2 県南及び全県におけるイネ縞葉枯病の発生地点率(8月上旬)の年次推移

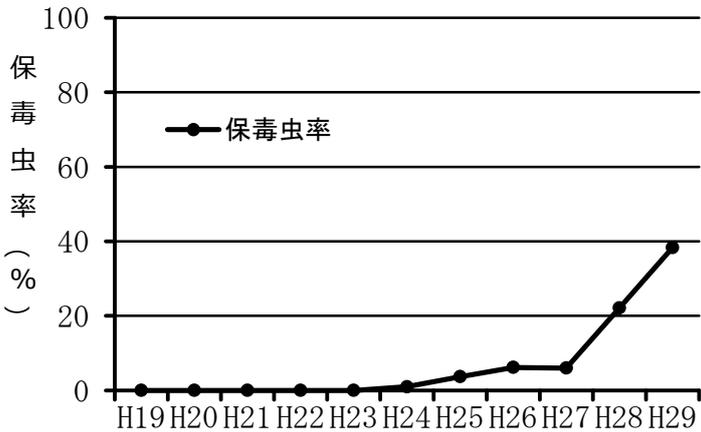


図3 つくば市におけるヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率(3月)の年次推移



**防除対策**

**[耕種的防除]**

|                 |   |
|-----------------|---|
| <b>秋季耕起</b>     | ひこばえ(再生稲)は、ヒメトビウンカの生息場所となり、ヒメトビウンカが発病株を吸汁することで保毒虫率が高まるため、 <b>収穫後は早めに水田を耕起しましょう。</b>                                     |
| <b>雑草管理</b>     | ヒメトビウンカは、イネ科雑草で越冬するので、 <b>雑草を防除しましょう。</b>   |
| <b>抵抗性品種の導入</b> | 抵抗性品種は、ウイルスを持ったヒメトビウンカに吸汁されても、ほとんど発病せず被害を受けません。主食用品種（茨城県産地品種銘柄）では「一番星」と「あさひの夢」が抵抗性品種です。また、飼料用イネでも抵抗性品種「月の光」を選ぶようにしましょう。 |

**[化学的防除]**

|                    |   |
|--------------------|---|
| <b>育苗箱施薬剤による防除</b> | 育苗箱施薬を行う際、移植時期が早い水田では、 <b>長期残効型の薬剤を使用する</b> と安定した防除効果が期待できます。 |
| <b>本田での防除</b>      | 水田で発生した幼虫を防除するため、6月中旬～下旬に本田散布を行います。                           |

(参考：茨城県農業総合センター農業研究所作成資料 および、茨城県病害虫防除所作成資料)